
白と黒の絵

櫻庭鬼灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白と黒の絵

【Nコード】

N7355G

【作者名】

櫻庭鬼灯

【あらすじ】

幻想的な絵を描くある画家は変わり者であったが、絵はとても素晴らしいものだった。けれどもそれは一度として人に評価されたことはなかった。けれどもその絵が賛美される日がやってくる。

ある町のはずれにある森に、一人の画家が住んでおりました。

小さな小さな小屋に一人で住んでおりました。

画家は日がな毎日絵を描いておりましたが、

別段それを生業にしている訳ではございません。

ですが画家は一日中、絵を描いておりました。

小屋の外に出る時とえば、町はずれにある友人の家に絵の具を貰いに行くだけでございます。

友人も画家のことを知っておりますし、

画家が街へ出て買い物ができるような者ではないとも分かっておりました。

そう、画家は絵を描く以外のことが全く出来なかつたので御座います。

食事も、文句を言いながらも友人の妻が小屋に運んでおりました。絵を描くことしかと言いましても、食べる、と言う動作は出来るように御座いまして、

いつも小屋の外に食い散らかしたようなそれが置いてありました。

画家は友人の所へ行っても、青、赤、と欲しい色を指定する事しか致しません。

そして友人は彼の言った、“足りないであろう”色を画家に手渡すので御座います。

人様から見れば、これ滑稽な情景で御座いましょうが、これが彼らにとっては普通と言うものなのであります。

そして画家は、その“足りている”絵の具で絵を描くので御座います。

ふと頭に浮かんだであろう光景を書くので御座います。

何故頭の中に、かと言いますと、どれも彼の絵には小屋の風景も友人宅の風景もないからで御座います。

友人の髭もじやな顔も。妻の白い肌も。古びた小屋も、ないので御座います。

画家がいつも描くのは、大凡小屋と友人宅しか行き来せぬ彼には描けぬ類のものでした。

花瓶に活けられた花束の絵。

女性と散歩をする子犬の絵。

クマのヌイグルミを持った、可愛らしい少女の絵。

本当に走り出しそうなまでの、雪と見紛うたてがみを持った馬。

池に浮かぶ、何輪もの蓮。

どれも日の下にいる、とても温かい幻想的なもの達ばかりでありました。

誰を何処をモデルにしたともないのに、彼の絵はいつもまるで現実のようでありました。

ですがそんな絵を描く彼の目は、いつもまるで、死人のようなので御座います。

ただ自分の握った、紙の上を走る絵筆を追っただけなので御座います。絵も、描いたら額に入れるも眺めるも何も致しません。

描き終えた温かな絵達は、まるで気に入らないと言うように床に放り投げられるので御座います。

その為に画家の家の床は絵たちでいっぱい。

歩こうにも、どうやっても絵を踏んでしまいそうなほどで御座いました。

そんなある日。

いつもは家において野菜を作っている彼が画家の家に訪ねて参りました。

友人の顔は深く曇っておりまして、土作業で逞しく固くなった拳も震えておりました。

友人は、彼は彼、と今まで画家に触れぬようにしてきましたが、流石に彼も心配になったので御座います。

今のままではいけないと、このまま放ってはおけないと、そう思っ

たので御座います。

彼は画家の小屋のドアを、ノックもせずには開けました。ですが絵を描いている途中の画家は彼に見向きも致しませんで、友人もそれに今日ばかりは苛立ったよう御座いました。

「おい」

荒々しく声をかけ、絵を踏み抜き肩を揺らしますが画家は筆を止めるばかりで彼を見ません。

「おい！」

もっと強い声で呼びますが、やはり画家は彼を見ませんでした。友人はそれに、もう我慢ならんと、画家が描いている途中の絵を手でぶったので御座います。

当然、絵は床にガタンと落ちてしまいました。画家は動きません。画家が描いておりましたのは、綺麗なきれいな海の絵で御座いました。

光る青い海に跳ねるイルカ、ハープを弾きならす人魚……。夢のような、まるで物語にでも出てきそうな、素敵な絵で御座いました。

ですが友人はそれを踏みつけてしまうのです。友人は、「画家を“ちゃんとした人”にしないで」と、それだけを思っていたので御座います。

友人はもう一度呼びかけました。おい、聞こえているのか、と。今度はそれに、うん、とだけ答えが返りました。

友人の顔は綻び、うんうん、と頷きます。

画家は友人を見上げ、新しい紙を持ち、言いました。

「もう一枚。もう一枚だけ絵を描いたら、一緒に町に行ってくれかい？」

新しい絵の具が欲しいのだよ。今度は自分で選んでみよう、きっと素敵な絵が出来る。

それに、今まで話さなかった分、温かいお茶でも飲みながら君と語らいたい気分なのだ」

友人はそれを嬉しく思い、彼の肩を持って揺さぶったので御座います。

「おお、おお！ そうしようではないか、我が友よ！」

「では、暫く待っていてもらえるかい」

「ああ、待とう待とう。お前が満足の行くまで絵を描くと良い。

そうしたら、その清々しい気持ちで街へ出かけようではないか」

「うん、そうしよう」

「ああ、そうしよう」

友人はそう言うと、大きな笑い声をあげ、うんと背伸びをしました。

そして、では外で待っていていよう、と小屋を後にしたので御座います。そして。

一時間が経った頃、画家はぼさぼさの頭を掻きながら小屋から出てきました。

「やあ、待たせてしまったね、親友」

「ああ、大丈夫だ。さあ、行こう」

「行こう」

ですが友人はそれを咎めはしませんでした。

画家とこうして腕を組み、歩けると言うことが嬉しかったので御座います。

そして画家は新しい絵の具を自分で買ったので御座います。

喫茶店に二人で入って、友人は珈琲を。画家は紅茶を飲みながら、語らったので御座います。

そして夕暮れになるまで、その夕暮れが真つ暗になるまで、飲み語り明かしたので御座います。

近くにいた男性女性も巻き込んだの、まるで盛大なパーティのような賑やかな日でした。

友人は、楽しかった、また、と画家と別れたので御座いますが、画家は小屋の前で項垂れておりました。

そうか、酒に弱かったのか、と友人は頷き背中を叩き帰っていきま

した。

そう、彼らはお酒も飲みました。ですが、画家が頂垂れる理由は他だったので御座います。

数日後。

数日後、友人が死んだので御座います。

画家はまた、あの日以来小屋から出てくることはなくなりました。そして画家の描く絵は、今までの温かな物とは全く違うものになってしまったので御座います。

真っ黒な絵の具を塗りたくり、群青色で人を描き、その輪郭線を赤や黄色でなぞりました。

そしてまた、真っ黒な絵の具をめちゃくちゃに走らせました。

そんな絵が、何枚も何枚も小屋に溜まっていきました。

明るい絵は、友人が踏破ったものと、誰かが踏破ったものしか、もうありませんでした。

ある日。

ある日の夜、道に迷った旅人が旅人の小屋を訪れました。

そして、何だ此処は、と呟きました。ですが次の瞬間、筆を走らせていた画家を押しつけたので御座います。

そして、その絵を月明かりに照らして叫んだので御座います。

心底嬉しそうに、真っ暗な画家の絵をこう言ったので御座います。

「ああ！ 何て素晴らしい絵なんだろう！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7355g/>

白と黒の絵

2010年10月21日09時06分発行